

## 若者がひきこもる意味と新たな学び方・ 働き方の保障

立命館大学 産業社会学部 山本耕平

内閣府；困難を有する子ども・若者の相談業務に携わる民間団体職員研修  
2012. 2. 1 国立オリンピック記念青少年総合センター

### 今日のテーマとのかかわりでお話したいこと①

- ①若者達が、なかまとの育ちをどう疎外されてきたのかを探る
- ・競争主義のなかで
    - ・人間の発達には、社会や文化と交渉し、同年齢集団との間の生じる適度な矛盾を使用するかで可能となる
    - ・自分という存在が周囲に承認されているという手応え、自分と共にいることによるこびを感じてもらえているという手応えを通じて得られる『自分が自分であって大丈夫だ』という自己肯定感をもつことがまず必要なのだ。それを欠く人間がたくさんいる（高垣，2009）
    - ・ツレやダチとつるむ族からひとりぼっちの系へ  
孤独感のない孤独から「やり場のない中で選択した孤独」（春日，2002）



若者のひきこもりの背景には、競争主義を中心とする社会が生み出した構造的諸矛盾がある。しかし、競争主義＝ひきこもりと一元的に捉えることはできない。そこで、どのような若者の生きづらさが生じてきたのかを探ることが重要である。

## 今日のテーマとのかかわりでお話ししたいこと②

---

②なかまとの育ちあいを追及してきた居場所実践に流れる支援哲学の検討

- ・ 集団主義教育批判にみる個，集団
- ・ 集団主義教育と発達
- ・ 発達保障理論はなにを伝えているか

③韓国HAJA Center (Yooja Salon)の哲学と我が国の協同実践に基づく若者支援の哲学に学びつつ，ひきこもり実践の再構成を試みる

---

▶ 3

---

## 若者の暮らしと語りにもみる競争主義

---

▶ 4

# 競争主義のなかで

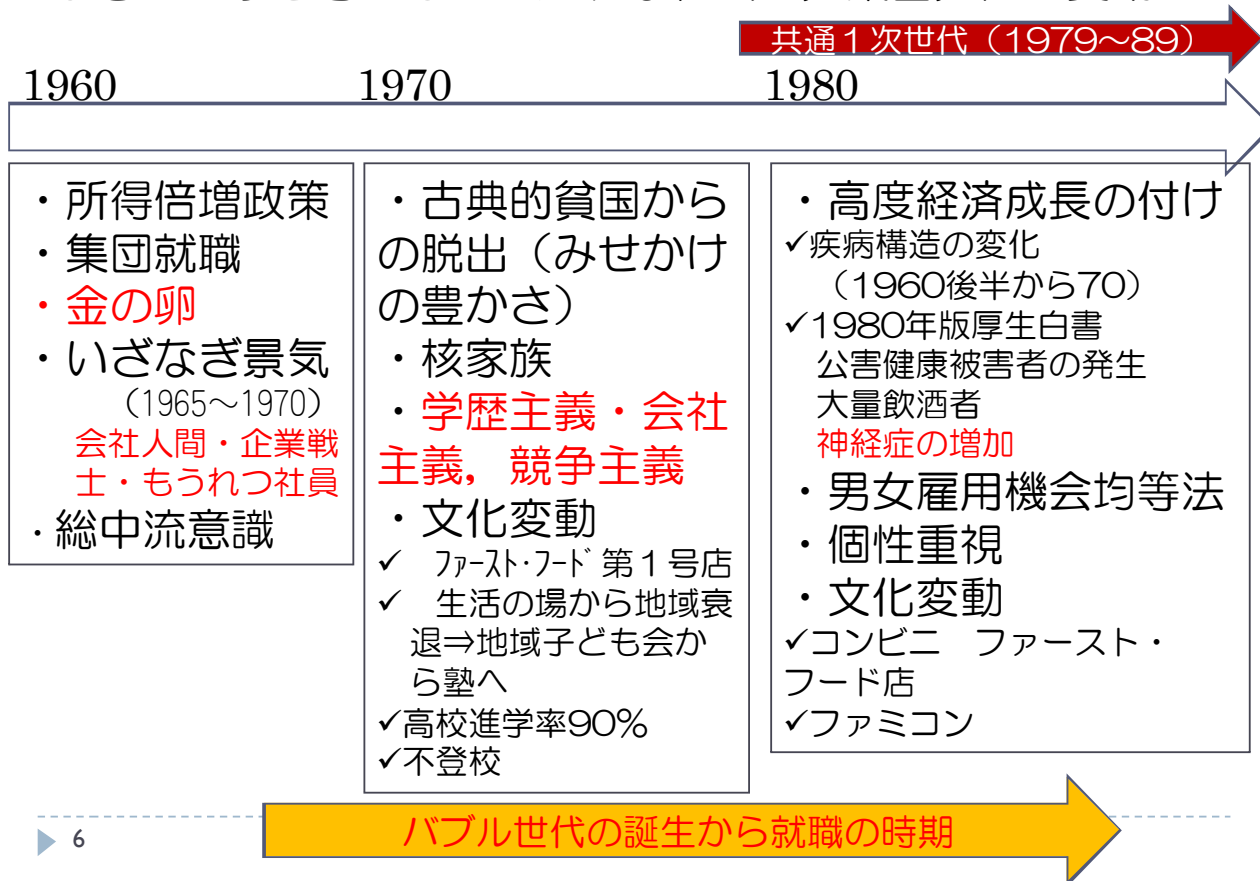
国連：子どもの権利委員会：総括所見：日本（第3回）2010年6月11日

70. 委員会は、日本の学校制度によって学業面で例外的なほど優秀な成果が達成されてきたことを認めるが、学校および大学への入学を求めて競争する子どもの人数が減少しているにも関わらず過度の競争に関する苦情の声があがり続けていることに、懸念とともに留意する。委員会はまた、このような高度に競争的な学校環境が就学年齢層の子どものいじめ、精神障害、不登校、中途退学および自殺を助長している可能性があることも、懸念する。

71. 委員会は、学業面での優秀な成果と子ども中心の能力促進とを結合させ、かつ、極端に競争的な環境によって引き起こされる悪影響を回避する目的で、締約国が学校制度および大学教育制度を再検討するよう勧告する。これとの関連で、締約国は、教育の目的に関する委員会の一般的意見1号（2001年）を考慮するよう奨励される。委員会はまた、締約国が、子ども同士のいじめと闘う努力を強化し、かつそのような措置の策定に子どもたちの意見を取り入れるよう勧告する。

▶ 5

## ひきこもりを考える上で大切な社会と、集団、個の変動



▶ 6

1990

2000年

- ・ バブル崩壊
- ・ 財政改革, 行政改革, 年金改革
- ・ 平成不況
- ✓ 大型倒産
- ✓ 企業のリストラ
- ✓ 失業率上昇
- ✓ 新卒就職難  
⇒失われた20年
- ・ ダイヤルQ2
- ✓ 援助交際  
「援助交際は売春です」(大阪府警)

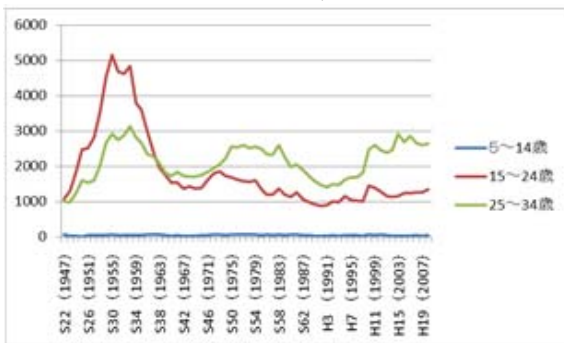
- ・ フリーター増加
- ✓ 高校卒業生の約1割
- ✓ 就職した生徒に限ると4割近く
- ✓ 80年代後半“正社員の不自由な働き方”に対する“自由で自律的な働き方”から求人数の減少, 労働者に占める若年比率が低下

- ・ ニート
- ・ ひきこもり
- ・ キレル17歳
- ・ 出会い系 (iモードからSNS)
- ・ アキバ系

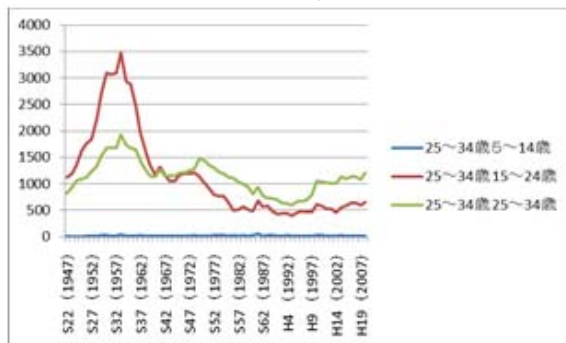
## 競争主義と若者の自殺

厚生労働省「人口動態統計」より作成

若者自殺推移：男



若者自殺推移：女



- ◆ 15~24歳階級 昭和30年前後に非常に大きな山を形成
- ◆ 25~34歳階級 昭和30年(1955)前後, 50年代(1975). 平成10年(1998)以降に山を形成

## 1975年当時に25歳だった人は、

---

- ▶ 家庭における児童の養育の担当者としての親には、育児についての自信喪失、過度の教育熱心など、さまざまな問題が混在（厚生白書，1970年版）
- ▶ 青壮年期にとつて、精神衛生の問題も見のがすことができない。近年，社会生活の複雑化，オートメーション化の進行等によるストレスの増大，人間性の抑圧等の条件が複雑にからみ合っ，精神の破たんを招く契機をなしている。患者調査による推計患者数でみるかぎり，精神病，精神神経症及び人格異常は，昭和30年から39年にかけて3倍弱となっており，精神障害の問題が深刻化していることを物語っている。（厚生白書，1966年版）

---

▶ 9

## 競争主義と若者の生活危機

---

### 1960年代

- ▶ 教育ママ<sup>☆1</sup>
- ▶ 高校進学率 女性が男性を上回る

### 1970年代

- ▶ 落ちこぼれ問題浮上
- ▶ 不登校問題浮上<sup>☆2</sup>  
昭和41年 1966年  
文部科学省 不登校（学校嫌い）調査開始
- ▶ 家庭内暴力顕在化<sup>☆3</sup>

---

▶ 10

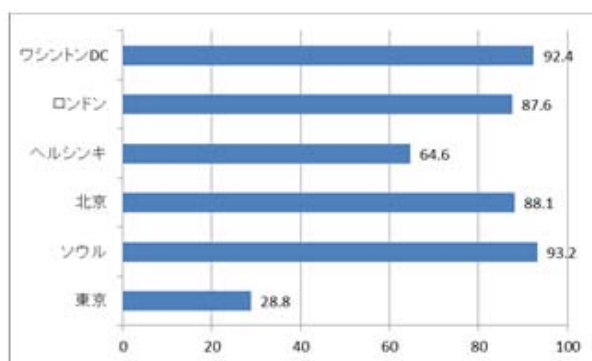
## ☆1 白書にみる教育ママの出現

家庭における児童の養育の担当者としての親には、育児についての自信喪失、過度の教育熱心など、さまざまな問題が混在している。（中略）一方、母親にみられるのは、家庭における母親の育児の価値を軽視して、すぐに公共の機関にたより、それが合理的であると信じているとか、**過度の教育熱心**とかである。児童の**遊ぶ時間を奪い、学習塾でつめこみ教育をすることが、児童の人格形成のうえに悪影響をもたらす、それがひいては情緒障害、登校拒否、小児ノイローゼなどを招いている**ことは、児童相談所でしばしばみられるケースである。（1971年：昭和46年厚生白書 総論第2章1-1）

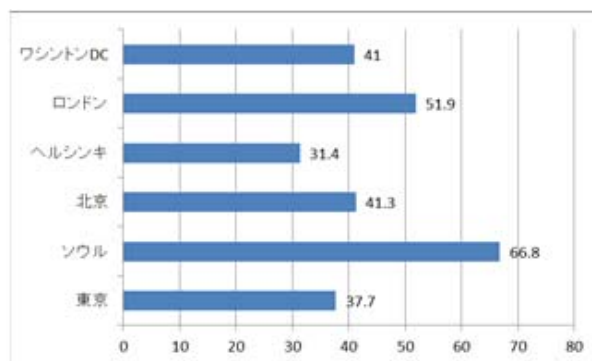
▶ 11

## 韓国で教育ママの出現

親は私にいい大学に行くことを期待している



ほとんど毎日「勉強しなさい」という



Benesse教育研究開発センター，学習基本調査・国際6都市調査，2008より作成

韓国 延世大学 趙韓惠浄は、マネージャー・ママの背景と特徴を次のように指摘

➤ IMF危機以降、不安に駆られ始める親たち：“誰も信じられない”

➤ 自己企画・管理的 386世代：適者生存原理の内面化

➤ 親の「受験」への全面的な投資と介入

➤ “子の成績表は、母の成績表”

（ppt 「友人の行きつけの店はどこなのか？」～敵対と孤立の時代を乗り越えて～）

▶ 12

## ☆ 2 白書にみる不登校問題

ここにいう軽度の情緒障害児とは、親子同胞関係の障害により、社会適応が困難となっている児童、たとえば登校拒否、乱暴、無口、恐怖等の問題行動を示す児童である。42年3月1日現在、施設数5、収容定員250人、在籍人員129人である。この施設は、現在設置数も少なく、いわば実験的段階にあるが、問題児童の早期発見、早期治療をめざす積極的な目的をもつた施設であり、近年の情緒障害児童の増加に対処するものとして今後増設する必要がある（1966年：昭和41年厚生白書第8章4-2）

昭和41年 学校嫌い調査（不登校調査開始）

▶ 13

## ☆ 3 競争主義が背景となった家庭内暴力(1970年代)

- ▶ 昭和48年(1973).1.30 受験に悩んで暴れる息子、母がしめ殺す、東京
- ▶ 昭和51年(1976).8.23 高1が親友を刺殺、山形県、成績トップで東大目指して猛勉強をしていたがノイローゼとなって留年「親友は自分より成績が悪いのに人気者で、中学の時に生徒会長になって自分は落選したからねたんで殺そうと計画していた」家庭内暴力も激しかった。父親は小学校校長。
- ▶ 昭和55年(1980).5.25 高校3年生(17)が大学進学を希望していたが、勤め先が倒産した父親(45)は就職するよう言い、ケンカとなって父親が息子を猟銃で射殺

▶ 14

## 1980年代の若者と精神的次元の困難さ

- ▶ 1980年版厚生白書  
1960年代後半から1970年代にかけての疾病構造の特徴
  - ・公害健康被害者の発生
  - ・大量飲酒者や神経症の増加
- ▶ 学歴主義・会社主義の下で競争を余儀なくされる1960年代以降、個人主義が強まる  
他者とのコミュニケーションを十分に確立できない  
不安神経症，対人恐怖，  
自己評価に対する不安を拡大させる 摂食障害
- ▶ モラトリアム人間から新しいモラトリアムへ  
社会的現実から一步距離を置いて自我を養い，将来を準備することが希薄となる

若者の全般的なモラトリアム化：校内暴力・境界例事例

▶ 15

## 1980年代の若者と「孤独感のない孤独」

- ▶ 「暴走族」や「ヤンキー」
  - ・自らの興奮を高める為に，独特のファッションで身を包む
  - ・家族と共にいることを望まない
  - ・自らの手で巧妙に工夫した車を心理的安全の「基盤」とする



仲間はいないがダチはいる  
空虚な生活時間かもしれないが，共に時間を  
送る つるむが創らない，つるむが残さない

- ▶ 新たに生じてきた「族」（「70年代に築かれた巨大な文化装置」：中西新太郎）を基盤とする族  
コンビニをダイニング族・・・学校あるいはクラブの  
帰りにコンビニの前で  
夕食を済ませ塾へ

▶ 16



## A男のこと

- 1973年生まれ 現在（2011年現在38歳）
- 小学校時代 1979年—1985年
- 中学校時代 1985年—1988年
- 高校時代 1988年—1991年
- 1992年からひきこもり 18歳～30歳
- 2003年 ひきこもり居場所へ参加
  
- 父：1946年生まれ 1958年に集団就職で青森からB県C社に就職  
1973年27歳で結婚，1982年ローンで郊外に建売住宅購入  
残業，残業，残業手当はローンに  
1983年 勤続22年(37歳)で工場主任  
会社主義，気づいた頃には，A男が「死にたい」と口にする  
「頑張らなければ」「頑張ればなんとかなる」
- 母：1952年生まれ 1970年高校卒業，C社に就職  
1973年21歳で結婚 翌年A男出産  
出産で退職，A男3歳の頃からパートに

## A男の語り

- A男：小学校高学年から中学校が終わる頃まで早く死にたいと思っていた。  
死にたいと思ったきっかけ？  
そんなのではないよ。でも、とにかく死にたかった。  
自分なんか存在していてもしょうがないと思った。
- 山本：そうなのか
- A男：クラスでも一人ぼっちだったし。
- 山本：担任の先生は、なにか話しかけてきてくれた？
- A男：「どうして、お前はそうなの？」「もう少しみんなと打ち解けたら」とアドバイスしてくれた。でも、どうしたらいいか解らなかった。
- 山本：それは、中学校終わるまで続いたの？高校は？
- 山本：そう。高校時代は？
- A男：うん、なんとなく過ぎた。高校を卒業してから環境工学の専門学校に進んだが、1年で中退した。周りの人と友達になれなかった。
- 山本：友達に？
- A男：そう。みんな友達になることを急いでいるように感じた。一緒にいないとのけ者にされた。自分は、人一倍友達を作るのが遅いし。友達の入り口が狭いように思う。

## A男が育った頃、地域・社会は

70年代中ごろ（高度経済成長期＋「巨大文化変動」）

- 子ども・若者の生活の場から地域の衰退 地域子ども会
- 伝統的な家制度や地域社会から核家族を中心とした地域社会
- 世襲制から学歴主義・会社主義。それを支える競争主義
- 高校進学率も70年代に90%超。大学進学率
- 70年代に築かれた巨大な文化装置（中西 新太郎）



竹内常一「青年らしさの衰退」（1980）

- 自我・アイデンティティを確立できず、大人になることを延引する傾向，青年であることを忌避する傾向。
- 自己本位傾向が強く、他者との共存や連帯を築き出せないまま、私的生活に埋没する傾向
- 社会に不信を、社会の前途に不安をもち、社会と歴史の発展に主体的、積極的に参加しない傾向⇒「無気力・無関心・無感動」、  
「生きがいの喪失」
- 非行、精神病理、自殺など反社会的・非社会的傾向

## いじめの構造と「孤独感のない孤独」

私事化社会の登場（森田，2010）

- 人々の関心や価値観の私事化 1980年代 顕著になる
- 日本社会を支えてきた価値観の揺らぎ  
「新人類現象」「私生活中心主義」「自分さがし」etc.
- 共同体の呪縛から、個人が自立する「個人化」への動向の一つ
- 公共性や他者に対して無関心になる 「私」性のなかにある欲求の無際限な拡張

社会的な孤立や社会的排除の問題，リスクヘッジの個人化



成績の良い子が常に勝者ではない。いじめの標的は成績のよい子にも向かっていく。それはある意味では勝者一敗者の再編成であり、日常化したストレスと欲求不満のはけ口でもある。被害者から加害者への転化は成績の局面だけでなく学級集団にひそむさまざまな序列化のなかで進行する。（森田/清水，1994-2001）

## リーダーだったクラスで……

その子（子）は気が短い部分があって、なおかつ、その子をキレさせると、同じクラスやったんですけど、クラスじゅうからはみられるんです。その子が先に言って、何ていうんですかね、話を回して、別にクラスの子らは私のことを嫌いなわけじゃないんやけど、その子が怖いというのか、私としゃべったら、どうなるかわかってるやろうなみたいな感じで、ある意味軽いじめですよね。そういうのを何回も経験しました、その子といてることで。それが苦い思い出です。

（J子：現在34歳，22歳から断続的にひきこもり）



- ▶ みんな同じ立場だから、私のことは理解してくれていた
- ▶ でも、力関係を変えることができなくて、一緒にいるのがすごくしんどかった
- ▶ その子にキレられたら、もう学校行きたくない。何か変な空気になってるんで、あんなとこ行きたくない。でも、勉強は嫌いでなかった。

▶ 21

## 家庭内暴力と「孤独感のない孤独」

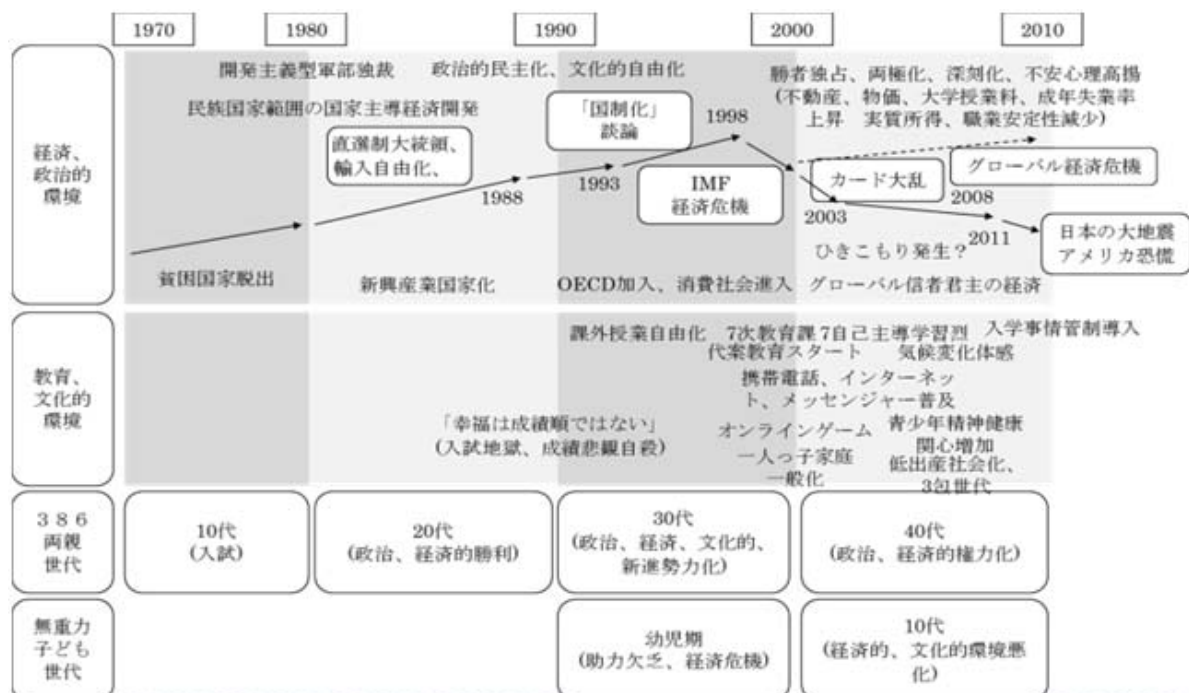
- ▶ 家庭内暴力に陥る過程をみると、親密さという関係が裏腹にもつ、「葛藤，混乱，歪み」を見出せます。あるいは、親密な関係には、虐待や暴力を許してしまう意識や態度が存在しているともいえます。家族以外の他人よりはプライバシーを共有し、互いに侵入しあうのです。感情共同体として連れそう家族のメンバーは、自他の境界が明確でなく、互いの距離感を失うことがあるということです。家族の内側に問題があればそれが外部にもれないように壁ができます。家庭内暴力は家族の恥となる。それは外部の他者に秘密と化すのです。（中村，2002）
- ▶ 生き生きせずに積極的に参加することによって安楽を得よと、嗜癖システムは私たちに迫ります。嗜癖は、気持ちをくじき、みせかけの平衡を崩しかねない認識を妨害し、システムに挑む暇がないほど多忙にさせます。（A・W・シェフ，1993-1997）

▶ 22

# 1990年代の若者達

- 1990年代初頭、バブル経済崩壊  
不況と就職難の時代「失われた10年」の到来から  
「失われた20年」へ
- フリーターの増加 ニート 2003年版の国民生活白書  
我が国の若者達をめぐる雇用は、若年雇用の優等生から大きな転換を遂げ、自己実現の手段としての職業選択という理想から後退
- 可視化されてきた若者の貧困  
年越し派遣村（2008年暮れの衝撃）  
非正規雇用のなかで解雇された若者達  
ホームレス化した者 ホームレス寸前の若者達が、  
年を越せないと、年越し派遣村に集まる
- デフレ下で厳しさを増す若年雇用

## 韓国社会とひきこもり (2011. 8月. Yooja Salon 니트, 히키코모리 청소년에 대한 한-일 공동연구 간담회 引用)



# 韓国社会とひきこもり

(니트, 히키코모리 청소년에 대한 한-일 공동연구 간담회 引用)

時代の「傾斜（経済的、社会的発展）」が1世代ぶりに逆転



父母世代：less to lose, more to win  
-60年代生まれ、80年代大学入学

- 「上昇」は勝利の歴史（経済的、政治的）
- 大学に通じる経済的、政治的、社会的階級上昇
- 近代的合理性が完成したと自ら信頼

(道具的合理性の状態にとどまっている)

子女世代：much to lose, less to win  
-90年代生まれ、幼少期にIMF  
2000年代10代

- 両極化、危機の歴史
- 80%を越す高等教育進学率、階級維持困難
- 道具的合理性で問題解決が不可能な世代、答えを出さなければいけない強迫に陥っている

▶ 25

## 「孤独感のない孤独」から「やり場のない孤独」へ

- ▶ 競争主義が若者の心に「勝ち」「負け」を明確にする
  - ・自己が他者からどのようにみられるのかという不安
  - ・自己が他者に苦痛を与えるようなものを持っているのではないかという不安
  - ・自己の存在が他者になんらかの苦痛を与えているのではないかという不安
- ▶ ある国立大学保健衛生センターに現れるメンタルヘルス上の課題を持つ学生（小林ら、2002）
  - ・小集団適応の困難：1対1より、1対集団が困難。凝集性の高い仲間体験の乏しさ
  - ・恋愛関係の未熟さ：親子関係において解決されるべき依存と甘えがそのまま持ち込まれ、一方的に退行し一方的に受容
  - ・ストーキングとセクハラ：加害者と被害者
  - ・親から分離と独立過程でのストレスと自己同一性危機
  - ・進路問題からのストレスや回避

▶ 26

## 集団所属の困難さと「やり場のない孤独」

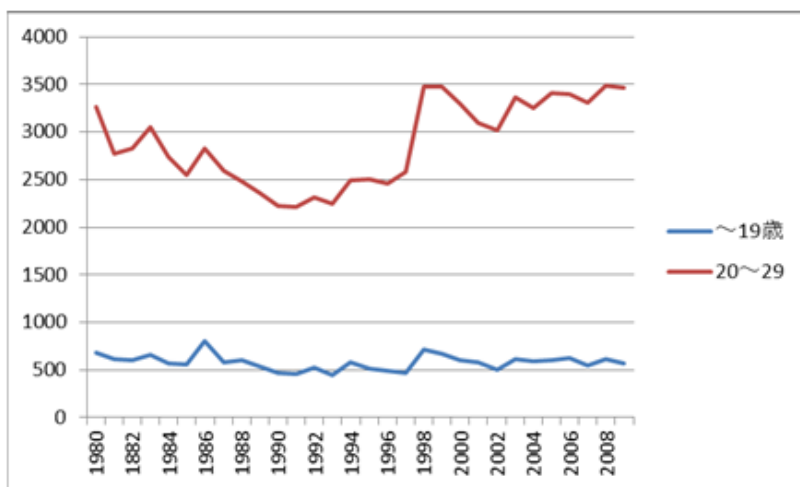
青年たちは、個の主張ばかりが問題にされて、集団への所属意識，すなわち自分が集団の一員でありそれに寄与しながら自分も集団も発展していくという感覚なしに育ってきている。昨今の学生達は、自分がその集団にかかわり作っていくという主体性を欠くために、自分が集団に受け容れられているか・十分評価されているかだけを心配する。すなわち、自分が傷つかないようにという自己愛的な心配の結果として、回避行動やひきこもりを発生させていると思われる。（小林ら，2002）



発達ライン：一者関係—二者関係—三者関係—個と集団—個と社会  
 一者関係：自閉ないしひきこもり，空想，妄想 孤独，内省  
 二者関係：まとわり付き，見捨てられ不安 安心，配慮  
 三者関係：嫉妬，疎外感 向上，仲間意識  
 個と集団：自己主張—自己抑制，役割，凝集—拡散，犠牲—保護，寄与，調和  
 個と社会：アイデンティティー，個の認識，社会の認識  
 （小林ら，2003）

▶ 27

## 自殺する若者達と1990年代



● 1990年，失われた10年への突入

● 1996年，文部省「いじめの問題に関する総合的な取組について」～今こそ、子どもたちのために我々一人一人が行動するとき～

- ▶ いじめの増加
- ▶ 地域住民の連帯希薄化
- ▶ 地域の教育力低下
- ▶ 異質の排除

若者（30歳未満）の自殺者の推移：2010年版警察庁自殺の概要資料より作成

▶ 28